



おじさんズ通信

2022年9月号(No.22)

発行元：登別市新生町4丁目緑風舎

発行者：おじさんズ3号

Web

http://www.ne.jp/asahi/takanet/mori/

🍷手前味噌稿

「鉦山線を止めた男」

いきなり「鉦山線を止めた男」といわれても、「なんのこっちゃ」と首をかしげる方がほとんどだと思いますが、そこを伏してお願いし、耳を傾けていただければ幸い至極です。

8月に発行された「文芸のぼりべつ」41号に、原稿用紙にして50枚ほどの創作を投稿しました。そのタイトルが「鉦山線～」なのですが、主人公は昭和5年まで幌別村に実在した藤江出来太（本名）なる人物です。住んでいたのは、JR 幌別駅から鉦山町方面へ車で15分ほど走った道道弁慶幌別線の途中で、今は幌別ダム湖の湖底に沈んでいる川上集落という場所でした。



作中では「岩田源三」の名で登場しますが、この男、幌別鉦山を発生源とする煙害に対して、反公害闘争へたった一人で立ち向かった筋金入りの硬骨漢です。闘いの頂点となったのは、鉦山会社の鉄道線路上への座り込みで、硫黄製品を積んだ列車を止めるという大胆不敵なものでした。

しかし、造材業への営業妨害から運転資金不足に陥り、一家はブラジルに開拓移民として渡りました。

「父さんは悪くなかった」

つい数年前まで、地元こんな人物がいたとはまったく知りませんでした。きっかけは郷土史や文化財に詳しいKさんとの会話からでした。

教えていただいた史資料の中で、キモとなったのは藤江出来太の孫・長内弘氏（故人）が残した「史観 金の幌別川」や、登別南高校人類研究部による聞き取り調査集でした。どちらも平成6、7年、つまり27年ほど前に文書化されたものです。

とりわけ、自身も幌別鉦山に勤めた経験のある長内氏がまとめた「史観」は秀逸ものです。彼の母親は出来太の長女で、一家がブラジルに渡る時はすでに嫁いでいて幌別村に残りましたが、日頃から父親がとった行動について「お父さんは何も悪くなかった」と長内氏に言い聞かせていました。

線路座り込みの抗議行動など、最初は誇張した作り話だろうと思っていた長内氏でしたが、その裏付けと

なる資料を見つけ、これは本当にあった出来事だと確信し、幌別鉦山の歴史資料といえる「史観」にまとめたとのことです。B5判450ページに及び分厚い「史観」はすべて手書きで、なおかつ利き手が不自由なため左手一本で書き上げたという執念には、ただただ脱帽するばかりです。

「山森院東南伐採居士」

その珍しい名前から「デッカさん」の愛称で慕われた藤江出来太ですが、一家八人はブラジルに渡った後、幾度かの転居を経ながら艱難辛苦の末、サンパウロ州のタビライという町に落ち着きます。途中、息子の一人はマラリアで亡くなり、四女は他家へ嫁いだりしますが、タビライでは森林伐採業で成功をおさめました。



藤江 出来太氏
(登別南高資料から)

明治18年11月、淡路島から両親、兄弟とともに幌別村に入植した当時7歳の出来太は結局、五十代前半に第2の故郷にも別れを告げる羽目になったわけですが、石もて追われる如くの離村ではなく、堂々とした、はるか1万7千キロかなたの異国の地への旅立ちだったようです。

亡くなったのは昭和27年5月、享年74歳。幌別時代を含め造材業に身を投じてきたことから、戒名は生前自ら決めていた「山森院東南伐採居士」。あの世に行っても、頑固一徹の相貌を崩しつつ、苦虫半分の顔を見せながら、伐り倒してきた樹木の数々に、わびを入れているのかもしれない。

人物伝的な創作を書き終えて、あらためてかみしめることは、先人がこうした史資料を残してくれた事への畏敬の念であり、その存在を教えてくれたKさんはじめ、関係者の方々への感謝の気持ちです。

「文芸のぼりべつ」41号を入手できないという方もおられるでしょう。「鉦山線を止めた男」の全文は、私のホームページ「おじさんズ」の「ちまちま文芸帳」にも掲載しました。

「おじさんズHOME」でネット検索するか、スマホであれば、右のQRコードで読み込むことができます。ぜひ、一読を。



自家製本に挑戦！

先日、登別市立図書館の郷土資料室に置かれている「文芸のぼりべつ」の創刊号と第2号の“復刻版的”な冊子作りに取り組みました。



昭和47年発行の第1号、正しい誌名は「のぼりべつ文芸第1集」でB5判の謄写版印刷本です。2年後に出された第2集=写真=も同じく、いわゆるガリ版刷りで、ホッチキス綴じしたもの。しかし、この時代に同じく鉄筆を握り、手に顔に謄写版インクを付けながら

ローラーを回した共有体験者としては、何とも懐かし、そこには地域の文芸運動をカタチにして残そうと挑んだ人々の熱意が伝わってきます。

ただ、印刷屋さんで作られた書籍と違い、人の手を経るに従い、いずれボロボロになるかもしれない。というわけで、図書館の了解を得て、硬めの表紙で包んだコピー版というかバックアップ誌を作ることになりました。

「言問い坂」ってどこ？

難儀したのは、巻頭言や短歌、俳句、作品、あとがき等のテキスト打ち込みと印刷です。判読不能文字は●に置き換え、同一作者の作品のページまたぎを出来る限り避けるなど配慮しましたが、完全とはいきませんでした。

しかし、パソコンで作品を打ち込んでいると、おや？ と目を引くことがあるものです。

バス喘ぎ あえぎ登りぬ オロフレの

言問い坂は 霧深くして

これは第1集に短歌を寄せた中田ミヨさんの作ですが、「言問い」といえば、東京・隅田川に架かる「言問橋（ことといばし）」が頭に浮かびます。そしてWikipediaからの引用ですが、「言問」の由来は在原業平が詠んだ下記の1首とか。

名にし負はば いざこと問はむ 都鳥

わが思ふ人は ありやなしやと

オロフレ峠に「言問い坂」なる、しゃれた名の坂が本当にあったの？ ナゾがまたひとつ生まれました。

万力があれば百万力

さて、我流自家製本ですが、用意したのは長さ25センチほどの板木2枚と百均で買った乾きが早いボンド、ダブルクリップや絵筆、それに大工仕事で使う

万力など。

作業工程ですが、両面印刷した紙の束をきれいにそろえて万力やクリップで挟み、背表紙側8ミリの幅でボンドを絵筆でスリスリ、スリスリ。次はノリ付け部分を板木と万力でがっちり締めて半日も置けばOK。厚めの表紙には赤い二重枠線で「再編集版」の文字を入れ、再び、ノリ付け、圧着して完成です。それにしても、主役の万力くん、向かうところ敵なしと妙に感心しちゃいました。



五円玉えれじい

生まれは大阪ゾーヘーキヨクでおます
産声をあげたのは昭和46年ですわ
今年で51歳になりまんねん
つままれたり、握りしめられたり
いったい何人の手から手へ
渡り歩いてきたと思いまっか？
今、けったいな爺さんが
何を思ったか、小銭入れにしまわず
わいだけ隔離したんですわ
プレミア硬貨になるの
待ってるうちやいまっか
アホでんな



薫風 烈風

▶焼いた鮭に納豆と生卵、そして味噌汁と白いご飯。そんな朝ごはんを食べられる幸せを、料亭メシしか食わないあの人たちは、知らないんだろうね。

大手衣料品メーカーと大手出版社の、83歳と79歳になる元会長と会長サン。東京五輪汚職事件で晩節を少々汚す程度ならまだしも、とうとうお縄頂戴と相成りました。

足を知らないから、「もっと儲けよう」「もっと稼ごう」とあくなき欲を追い求めるのか。おまけに死ぬまで、お山の大将でいたいから、裸の王様になっていることに気づかないのでしょうか。これ、老醜と言わずして何と言う。

まあ、ひと様に迷惑をかけず、出来るだけ静かに余生を送るのみです。

▶「歴史小説の資料集めに地方へ行く私は、その地の図書館を頼りにしている」と、作家の吉村昭氏は「史実を歩く」の中で、述べています。すでに故人となられましたが、もし似たような作家さんが来訪されたら、要望に応えられる図書館であってほしい、と一層の充実を願っております。では、皆さん、お元気で〜。